AC燦

共創（リフレクティブ）データブック

目次

P.1・・・・・データブックの使い方

P.3・・・・・京産共創プロジェクト第1弾

P.7・・・・・Coffee Break

P.8・・・・・AC燦1周年記念イベント

P.12・・・・・京産共創プロジェクトⅡ

P.16・・・・・京都産業大学データ

P.18・・・・・おわりに

データブックの使い方

文責：伊藤　琴音

京都産業大学 学生 FD スタッフ AC 燦が発足してからの足跡。今回は、その中でも燦がこれまでに開催したイベントをピックアップして、内容や結果などをデータ化しました。

データブックを作ったきっかけ

AC 燦が出来て 1 年 7 カ月。期間は短いですが、その間に沢山のイベントや交流などの活動を行ってきました。

イベントを続ける上で、これまでに実施したイベントとの連続性を保ち、**これまでの議論を無駄にせず、積み上げるための工夫の必要性**を感じており、「振り返りのデータブックを作ってはどうか？」という意見から出発し、本データブックを作成するに至りました。本データブックでは、**これまでのイベントの概要と得られた意見、論点をデータで簡単に振り返る事ができます。**

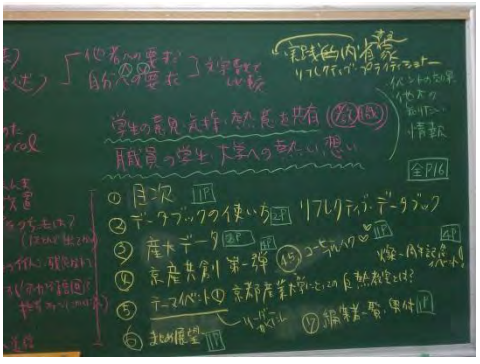


Fig1. データブックの構成案

共創シートとは？

私たち、Academe Co-Creating Committee(大学共創委員会) 燦(SAN) は、**イベントを実施する度に、参加した学生・教員・職員を対象とした共創意識の調査**を行なっています。

この調査は、次のような特色があります。

- この調査では、調査票（アンケートシート）を、「共創シート」（P5,P10,P13）と呼んでいます
- **参加者である学生・教員・職員の各人が大学を三者で創り上げるうえで、どのように関わりたいと感じているのか**を把握します
- 参加者が各イベントにおいて、どのような共創がなされたと感じたかを把握します
- **各イベントが大学共創に対し、どのような効果をもたらしたかを把握**します
- その後のイベントにおいて、さらなる共創意識の向上が可能となるよう、各調査の結果を、企画・運営に活用しています

このデータブックでは､「京産共創プロジェクト第一弾～京都産業大学をどう創っていくか～」「AC 燦結成一周年記念イベント『京都産業大学にとって白熱教室とは？』」「京産共創プロジェクトⅡ～京都産業大学をどう創っていくか～」の３つのイベントについて、共創シートの結果を掲載しています。

共創シートでは、各設問を「共感する」「どちらかというと共感する」「どちらでもない」「どちらかというと共感しない」「共感しない」の５段階で評価する形式をとっています。

Fig2. データブックを作成する AC 燦メンバー

京産共創プロジェクト 第１弾！

文責：竹谷　美里

2011 年 12 月 9 日に「燦 presents『京産共創』プロジェクト～京都産業大学をどう創っていくか～」を実施し、**学生５８名・教員１７名・職員 29 名の計 104 名**が参加しました。京産共創プロジェクトは、**学生 FD スタッフ AC 燦のメンバーで行う最初のイベント**となりました。本コーナーでは、この**イベントの概要と、得られた気づきを振り返ります。**

京産共創プロジェクトの目的

京産共創プロジェクト（以下本プロジェクトという）には、**「京都産業大学を学生・教員・職員みんなで協力して創っていこう」**という思いが込められています。

本プロジェクトを開催した目的は以下の 3 点です。

Fig3. 談笑する参加者

① 学生・教員・職員の三者が互いの立場を超えて意見交流ができる場の提供をすること
② よりよい京都産業大学を三者が互いに協力し創っていくための契機とすること
③ それぞれが考える問題の所在や大学が目指すべき方向性を明らかにし、今後の活動内容を検討すること

京都産業大学の良いところ

本プロジェクトの参加者は京都産業大学の良いところについて、

◇**「キャンパス環境の良さ」**
◇**「一拠点総合大学であること」**
◇**「学生が明るく元気であること」**

の 3 つの意見を、特に多く挙げています。**大学の立地環境や特色、学生の雰囲気に関する意見が多かった**ことが分かります。

学内で生活していると、咲き誇る季節の花々を愛でることが出来ます。また、食堂では大学改善のためのアンケートを実施しており、次々と新しい施設が建設されています。このような状況が、京都産業大学の環境の良さを実感する素地となっていると思われます。

Table1. 京都産業大学の良いところ

順位	意見内容	総数
①	自然が豊か	22
②	一拠点総合大学	21
③	学生が元気・明るい	11
④	食堂が充実している	5
⑤	図書館が広くて綺麗	4
⑥	キャリア教育が充実している	3
⑥	履修科目の自由度が高い	3
⑥	授業が楽しい・おもしろい	3
⑥	活気がある	3

京都産業大学の改善してほしいところ

一方、京都産業大学の改善してほしいところについては、

◇**「交通アクセスの不便さ」**
◇**「学生のマナーの悪さ」**

の 2 つが多く挙がりました。また、キャンパス内の環境については、坂や階段などの具体的なものについての要望も挙げられました。その他に、主に教職員から「最近の学生はおとなしい、自信がない」といった声もあり、学生との交流に意欲的な意見が多数を占めました。さらには「今以上に活気ある学生を増やし、活気のあるキャンパスにしたい」という意見も見受けられました。

これは、参加者が、大学構成員として、**「学生が、より活きいきとするキャンパスにしていきたい」**という意見を共有できたひとつの証拠と言えるでしょう。

Table2. 京都産業大学の改善してほしいところ

順位	意見内容	総数
①	交通アクセス	13
②	学生のマナー （ゴミ捨て、食堂、喫煙）	12
③	授業中の私語	6
④	最近の学生はおとなしい	5
④	キャンパス内の環境（坂・階段）	5
⑥	キャンパス内の環境 （窓口・施設の閉室時間が早い）	3

Table3. 京産共創プロジェクト第１弾　共創シート

学生・教員・職員別共創シート結果の一覧（学生 N=31, 教員 N=11, 職員 N=22）

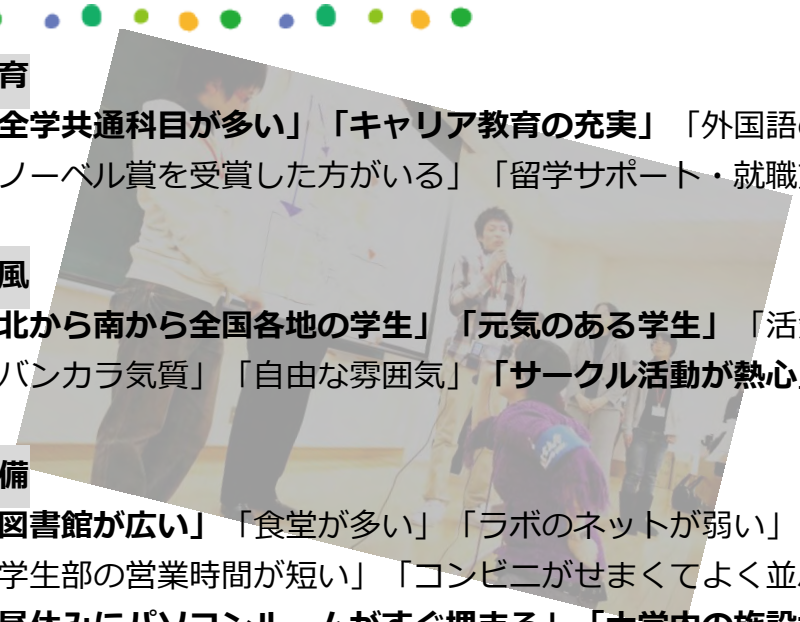
	I. 回答者属性調査	学生	教員	職員
	I-I. 産大帰属意識	3.81	**4.28**	**4.62**
8	京都産業大学が好きだ	**4.06**	**4.20**	**4.59**
11	京都産業大学の学生が好きだ	3.56	**4.36**	**4.64**
	I-II. 大学運営モチベーション	3.79	**4.32**	**4.41**
1	以前から大学に関して何かしたいと思っていた	**4.03**	**4.09**	**4.82**
10	京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.56	**4.55**	**4.00**
	I-III. しゃべり場適応度	3.27	3.30	3.65
2	自分は積極的に自己表現する方だと思う	3.22	3.27	**4.00**
3	初対面の人と話すのが好きだ	3.31	2.82	3.82
13	何かを考えたり、創ったりするより、与えられた課題に取り組む方が好きだ	3.28	3.82	3.14
	I-IV. 課外活動における充実度	3.77	3.45	3.91
4	クラブ・サークル活動で自分は充実している（学生の頃充実していた）	3.75	3.45	3.91
5	クラブ・サークル活動以外の課外活動で自分は充実している（学生の頃充実していた）	3.78	3.45	3.91
	I-V. 正課活動における充実度	3.92	**4.20**	3.77
6	授業で学ぶのが好きだ（学生の頃好きだった）	3.59	**4.40**	3.06
7	好きな授業・後輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	**4.25**	**4.00**	**4.48**
	II. イベント全体での共感度調査	学生	教員	職員
	II-I. 場を楽しむ	**4.67**	**4.14**	**4.73**
14	楽しかったと思う	**4.72**	**4.09**	**4.77**
20	参加した甲斐があったと思う	**4.63**	**4.18**	**4.68**
	II-II. 大学を創る意欲の喚起	**4.44**	**4.09**	**4.64**
16	一緒に大学に関して何かをしたいと思うようになった	**4.38**	3.82	**4.68**
18	大学を共に創ろうとは思えなかった*	**4.50**	**4.36**	**4.59**
	II-III. 大学の活性化	**4.55**	**4.50**	**4.48**
15	イベントスタッフがいきいきしていた	**4.66**	**4.73**	**4.60**
17	周囲の参加者はつまらなそうだった*	**4.44**	**4.27**	**4.36**
	II-IV. 構成員同士の親近感の増幅	**4.33**	**4.33**	**4.37**
19	他の参加者に対し、以前より親近感が持てるようになった	**4.22**	**4.30**	**4.23**
21	アットホームな雰囲気があった	**4.44**	**4.36**	**4.50**
	III しゃべり場での共感度調査	学生	教員	職員
	III-I. もっと話したい	**4.52**	**4.14**	**4.36**
22	しゃべり場は、時間が短く、もの足りなかった	**4.47**	3.91	**4.09**
23	しゃべり場は、時間が長過ぎ、途中で飽きてしまった*	**4.56**	**4.36**	**4.62**
	III-II. 意見の出しやすさ	**4.14**	**4.32**	**4.09**
24	しゃべり場では、自分はリラックスして意見を言う事ができた	**4.03**	**4.27**	**4.32**
25	しゃべり場で、グループの参加者は概ね自由に発言できていたと思う	**4.25**	**4.36**	3.86
	III-III. しゃべり場の意義深さ	**4.45**	**4.43**	**4.81**
26	しゃべり場には、意義を感じない*	**4.31**	**4.45**	**4.91**
27	しゃべり場で、学生・教員・職員でしゃべってみてよかった	**4.72**	**4.45**	**4.82**
34	しゃべり場では、なんの気づきも得られなかった*	**4.31**	**4.40**	**4.71**
	III-IV. 相互理解の促進	**4.38**	**4.64**	**4.59**
28	しゃべり場では、私の言いたいことは誰にも伝わらなかった*	**4.19**	**4.64**	**4.55**
29	しゃべり場で、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	**4.56**	**4.64**	**4.64**
	III-V. グループごとのテーマをもっと自由に	3.79	3.64	3.36
30	具体的なテーマを与えられて話す方が話しやすい*	**4.06**	**4.27**	3.86
31	テーマはグループごとに自由に決めて話したい	3.53	3.00	2.86
	III-VI. 全体ルールの必要性	3.61	3.65	3.81
32	しゃべり場の前にルールの提示があったのは役立ったと思う	3.91	3.80	3.81
33	しゃべり場のルールはグループごとに決めたかった*	3.31	3.50	3.80

※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号（掲載順に付与）を示しています。

※数値は、各項目の平均値であり、4.00 以上をゴシックで、4.50 以上をマーカーで示しています。

※設問末尾に*が付与されている項目は、反転項目です。

本プロジェクトの意見詳細



教育

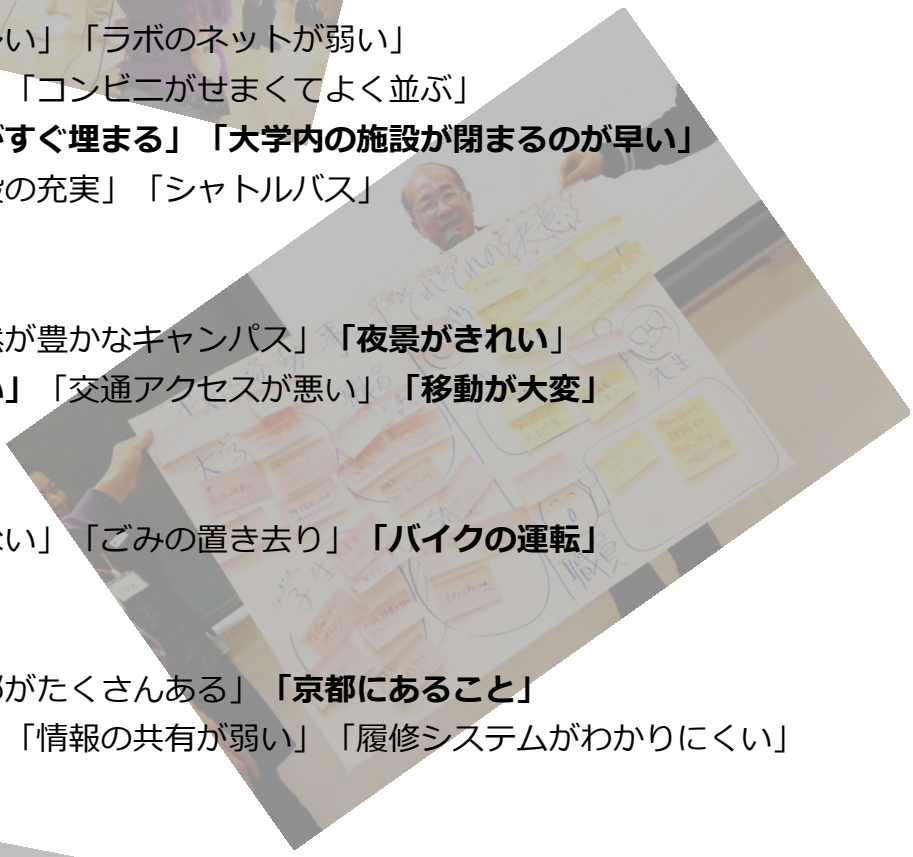
「全学共通科目が多い」「キャリア教育の充実」「外国語のネイティブの先生が多い」
「ノーベル賞を受賞した方がいる」「留学サポート・就職支援がしっかりしている」

学風

「北から南から全国各地の学生」「元気のある学生」「活気のある雰囲気」
「バンカラ気質」「自由な雰囲気」**「サークル活動が熱心」**「学生が素直」

設備

「図書館が広い」「食堂が多い」「ラボのネットが弱い」
「学生部の営業時間が短い」「コンビニがせまくてよく並ぶ」
「昼休みにパソコンルームがすぐ埋まる」「大学内の施設が閉まるのが早い」
「天文台がある」「体育施設の充実」「シャトルバス」



環境

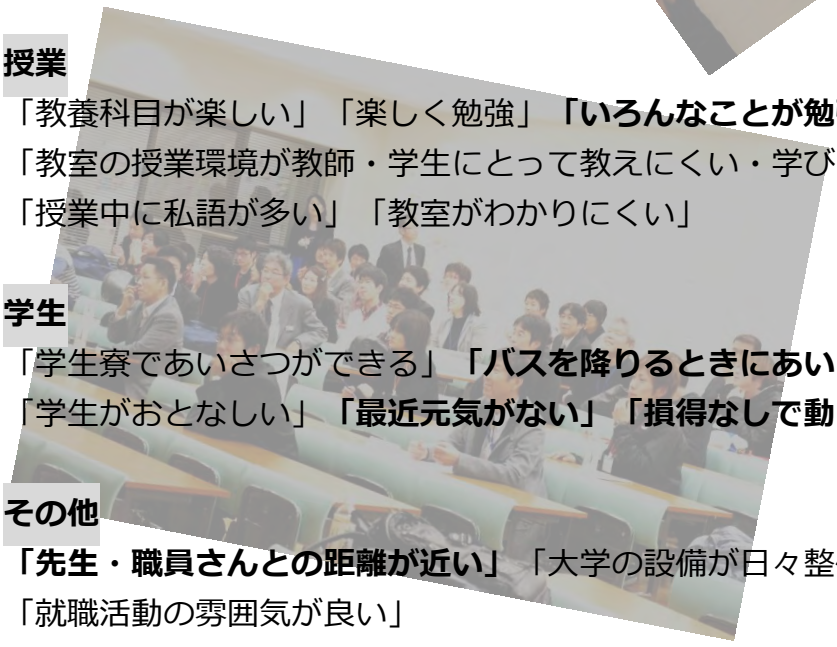
「紅葉・桜がきれい」「自然が豊かなキャンパス」**「夜景がきれい」**
「分煙」**「ポイ捨てが少ない」**「交通アクセスが悪い」**「移動が大変」**

マナー

「使用済みの食器を片付けない」「ごみの置き去り」**「バイクの運転」**

大学

「一拠点の総合大学」「学部がたくさんある」**「京都にあること」**
「学部によって距離が遠い」「情報の共有が弱い」「履修システムがわかりにくい」



授業

「教養科目が楽しい」「楽しく勉強」**「いろんなことが勉強できる」**
「教室の授業環境が教師・学生にとって教えにくい・学びにくい」
「授業中に私語が多い」「教室がわかりにくい」

学生

「学生寮であいさつができる」**「バスを降りるときにあいさつをする」**
「学生がおとなしい」**「最近元気がない」「損得なしで動く」**

その他

「先生・職員さんとの距離が近い」「大学の設備が日々整備されている」
「就職活動の雰囲気が良い」

Coffee Break…

ここでは、AC 燦が 2012 年 8 月 20、21 日に行った合宿について、参加したセラデス（教育支援研究開発センター）職員さんに感想をお伺いします。真面目なことからアホなことまで、話の脱線も併せて息抜きにどうぞ。

吉田天平（以下 T）：えっと・・・で、何をやったんですか？

藤原めぐみ（以下 F）：ファシリテーション研修を。
南さんがパワーポイントで説明してくれたんですよ（嬉）
山内尚子（以下 Y）：私たち、燦自体も、実践は積んできたけど、理論をみんなで勉強する機会は全然作ってこなかったから、そういう意味ではすごくいい機会になって、学ファシやってる南君が講師を…（(ピカッ、ゴロゴロゴロ

<一時中断…>

T：肝試しに行ったと聞きましたが？

Y 結局、職員は誰も行ってへんのよ。

T：学生だけですか！？

Y：午前 3 時過ぎくらいにお風呂入ってなかったから入ろうと思って、３０分後くらいに出てきたら誰もいない！（笑）そこにびっくりして、皆速攻寝たんやー、と思ったら永山君が一人だけ椅子でうつ伏せの状態で寝てて、どうしたん！？倒れてんの！？と思った（笑）

T：何で永山君だけ…

Y：いや、永山君と林君と
南君と山本君はいたらしい。
それ以外の子は肝試しに行ったっていう…

ゴロゴロ…ピシャーン！！

Y：落ちた！絶対落ちた。
F：こわ～い（泣）

T：…合宿の感想は？

F：たのしかった。私自身がファシリテーターをしたことがないので、１回やってみたいなぁと思いました。初めての子がファシリテーターをやっていて、止まっていることがあったんですね。そこで、みんなサポートをしていて、「こうした方が良いんちゃう？」とか言ってあげていて、そういった姿勢がすごくいいなぁと思いました。

T：こんなもので大丈夫ですかねぇ…。

Y：えっ？こんなんでよかったん？（笑）

AC 燦結成 1周年記念イベント！

文責：芝山　侑希

燦は2012年6月29日、「京都産業大学にとって白熱教室とは？」をテーマに、マイケル・サンデルが行っている**双方向型授業に関するしゃべり場を開催**しました。参加者数は**96名（内訳：学生62名、教員15名、職員19名）**です。本イベントにおいて、京都産業大学における双方向型授業のあり方についての議論を行い、ここではその考察を記します。

サンデルと双方向型授業

ハーバード大学のマイケル・サンデルは「白熱教室」や『これからの「正義」の話をしよう』といった書籍で有名な政治哲学者であり、双方向型授業の実践者でもあります。**双方向型授業とは、教授が一方的に話をして講義を展開するのではなく、学生に意見を述べさせ、その意見を利用し講義を進める**という、学生との対話を意識した授業形式です。少人数授業でも難しいと思われるこの形式を、彼は大人数でやってのけてしまいます。

Fig4. 袋に収まるミニサンデル

参加者の意見の概要

サンデルが行っている双方向型授業を、京都産業大学に導入するということについて、学生や教職員はどのような意見を持ったのでしょうか。

本イベントの参加者は、サンデルのような、**聞き手を引き付ける授業の展開**や、教員の**ユーモアのある話術**に好意的であるという意見が多く挙げられました。また、教員からの**問題提起**によって更に参加者の授業内容に対する理解が深まると思われます。

一方で、答えがない議論なので授業の振り返りが難しいという意見もありました。

Fig5. 準備に追われる燦メンバー

Fig6. しゃべり場の風景その１

意見の詳細

好意的

「先生と学生の会話がある」「多くの考え方に出会える」
「授業への積極的参加」「勉強するきっかけになる」
「学生の意見をうまく議論の材料に取り入れ、展開させている」
「いろいろ考えることができて刺激的」「授業のテンポがよい」
「たとえにユーモアを感じる」「教授の話術がすごい」「鋭い問題提起」

懐疑的

「成績評価はどうするか？」「講義とは違った場でやるべきでは？」
「議論には知識が必要」「答えがないからもやもや感が残る」「台本が必要」

その他

「学習分野の内容によっては興味を持ってもらえるのでは？」
「教員、職員による白熱教室を展開してもおもしろいのではないか」
「学生を指名することで全員参加型にしている」

Table4. AC 燦結成 1 周年記念イベント　共創シート

学生・教員・職員別共創シート結果の一覧（学生 N=39, 教員 N=13, 職員 N=13）

Ⅰ.回答者属性調査		学生	教員	職員
Ⅰ－Ⅰ.産大帰属意識		3.74	4.59	4.62
1	京都産業大学が好きだ	4.08	4.54	4.69
8	京都産業大学の学生が好きだ	3.41	4.64	4.54
Ⅰ－Ⅱ.しゃべり場適応度		3.55	3.38	3.88
2	初対面の人と話すのが好きだ（学生の頃好きだった）	3.67	3.38	4.00
4	自分は積極的に自己表現するほうだ	3.44	3.38	3.77
Ⅰ－Ⅲ.大学運営モチベーション		3.64	3.88	4.56
3	以前から大学に関してなにかしたいと思っていた	3.77	3.67	4.67
10	京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.51	4.08	4.46
Ⅰ－Ⅳ.正課活動における充実度		3.92	3.97	4.06
5	授業で学ぶのが好きだ（学生の頃好きだった）	3.69	3.85	3.92
7	好きな授業・後輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	4.15	4.09	4.20
Ⅰ－Ⅴ.大講義の親和意識		4.04	3.35	4.03
6	自分は大講義（受講生200人程度から大講義とする）を受講することが多い方だ	3.49	2.69	3.38
9	これまでに大講義（受講生200人程度から大講義とする）を受けたことがある	4.59	4.00	4.67
Ⅱ.イベント全体での共感度調査		学生	教員	職員
Ⅱ－Ⅰ.場の価値		4.13	4.08	4.38
11	楽しかったと思う	4.15	4.08	4.38
14	参加した甲斐があったと思う	4.10	4.08	4.38
Ⅱ－Ⅱ.構成員同士の親近感の増幅		3.96	4.00	4.19
12	他の参加者に対し、以前より親近感が持てるようになった	3.79	4.08	4.23
18	他の参加者の意見に、周囲の人々は共感していた	4.13	3.92	4.15
Ⅱ－Ⅲ.双方向型授業への興味の喚起		4.05	3.08	4.54
13	サンデルが行っているような双方向型授業を受けてみたい	4.05	3.15	4.54
20	サンデルが行っているような双方向型授業をやってみたい（教員のみ）		3.00	
Ⅲ－Ⅳ.授業に対する設計意欲・参加意欲の向上		3.85	3.42	4.13
15	このイベントは、今関っている授業の在り方について考え直す機会になった	3.95	3.85	4.08
16	大講義でも、主体的に授業を受けたい（授業の形式を今後の参考にしたい）	3.74	3.00	4.18
Ⅲ－Ⅴ.授業への準備の必要性に対する設計意欲の促進		4.24	4.35	4.46
17	双方向型授業に参加して発言するためには、入念な事前学習が必要だ	4.13	4.54	4.31
19	双方向型授業を実施する教員は、入念な事前準備が必要だ	4.34	4.15	4.62
Ⅲ.しゃべり場形態での共感度調査		学生	教員	職員
Ⅲ－Ⅰ.しゃべり場モチベーションの喚起		3.97	3.69	3.73
21	しゃべり場は、時間が短く、もの足りなかった	3.67	3.15	3.46
24	しゃべり場は、時間が長すぎ、途中で飽きてしまった*	4.28	4.23	4.00
Ⅲ－Ⅱ.テーマ設定の意義		4.05	4.11	4.13
22	他の参加者の意見は、現実味を感じられなかった*	4.10	4.08	4.08
23	異なる意見の共有は好奇心をくすぐられる	4.21	4.33	4.46
25	「京都産業大学の授業」という具体的なテーマは、身近で考えやすかった	3.85	3.92	3.85
Ⅲ－Ⅲ.相互理解の促進		4.08	4.31	4.09
26	しゃべり場では、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	4.38	4.54	4.33
27	しゃべり場では、自分の思っていることを他の参加者に伝えられた	3.77	4.08	3.85

※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号（掲載順に付与）を示しています。

※数値は、各項目の平均値であり、4.00 以上をゴシックで、4.50 以上をマーカーで示しています。

※設問末尾に*が付与されている項目は、反転項目です。

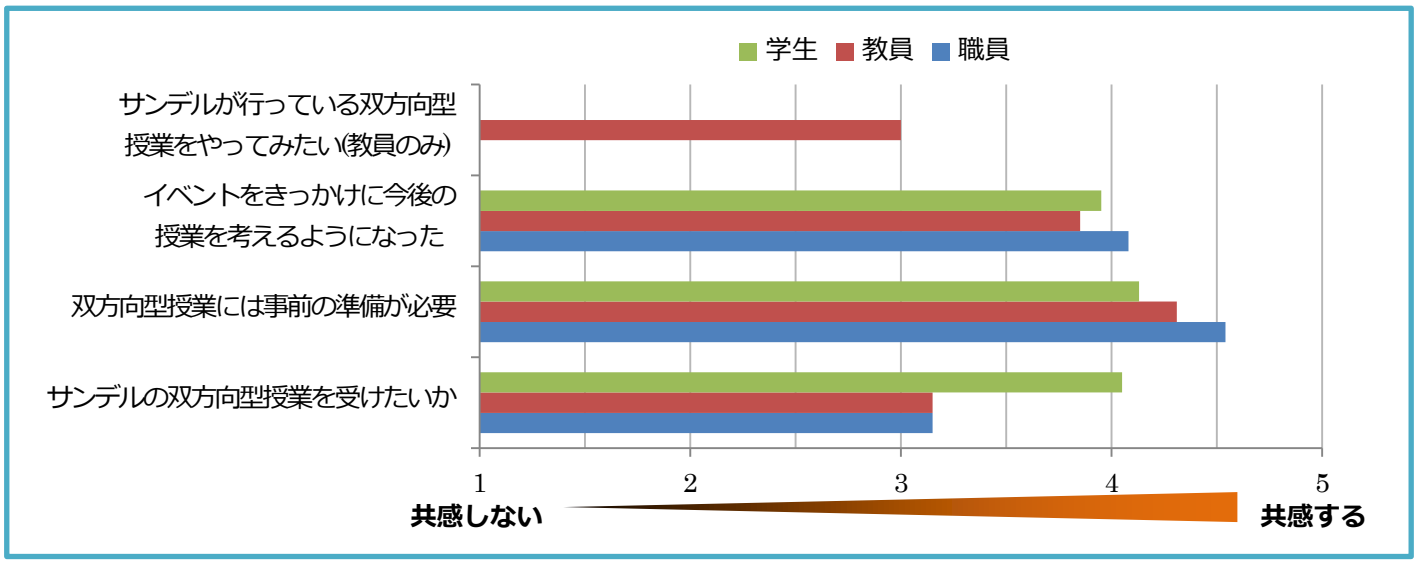


Fig7. 共創シートからの抜粋

グラフの考察

本イベントでの特徴的な質問項目について、上記にグラフとしてまとめました。

このグラフを参照すると、大講義で授業を行う場合、**学生・教員・職員共に、双方向型授業には事前の準備が必要だと感じている**という結果が確認されました。

また、「このイベントは、今関わっている授業の在り方について考え直す機会になった」という調査項目では、三者とも高い評価を得ることができました。

一方、教員に対するサンデルの双方向型授業の実施意欲調査においては、実施意欲が十分にあるとは言えない結果となりました。

Fig8. しゃべり場の風景その2

今後の課題

上記の考察から、準備・学習が必要であるということを踏まえつつ、双方向型授業を行う上でどのような授業内容にするか、また、どのような運営・対策が必要になるかを、**掘り下げて議論を進める必要がある**と考えます。

Fig9. イベント終了後の様子

京産共創プロジェクトⅡ！

文責：坂本　由香

燦は 2012 年 12 月 14 日、「燦 presents 『京産共創』プロジェクトⅡ ～京都産業大学をどう創っていくか～」を実施し、**学生 59 名・教員 10 名・職員 20 名**の**計 89 名**が参加しました。本プロジェクトは、昨年に行われた京産共創プロジェクト第１弾（P３参照）の継続的な取組として開催したものです。ここではイベントの内容を振り返ります。

第 1 弾と何が違うの？

本プロジェクトは、第１弾のプロジェクトで挙がった意見・アンケートの結果をもとに、テーマを 3 つ設定しました。そして、しゃべり場では参加者に自分が興味のあるテーマを選択してもらう形式をとりました。

第 1 弾の結果を活かして議論を深めたところ、本プロジェクトでは具体的に大学で今後、取り組めるアイデアを収集することに成功しました。本プロジェクトで得られた具体的なアイデアは、「燦」の今後の活動内容へと反映していきます。

テーマ

①元気な学生が多い原動力は？
②ワンキャンパスを活かすためには？
③好きな授業、人に勧めたい授業とは？

Table5. 京産共創プロジェクトⅡ　共創シート

学生・教員・職員別共創シート結果の一覧（学生 N=35，教員 N=9，職員 N=14）

	I. 回答者属性調査	学生	教員	職員
	I-I. 産大帰属意識	3.77	4.56	4.72
1	京都産業大学が好きだ	3.97	4.56	4.86
9	京都産業大学の学生が好きだ	3.57	4.56	4.57
	I-II. 大学運営モチベーション	3.60	4.17	4.32
3	以前から大学に関して何かしたいと思っていた	3.63	4.11	4.57
10	京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.57	4.22	4.07
	I-III. しゃべり場適応度	3.25	4.00	3.68
4	自分は積極的に自己表現する方だと思う	3.00	3.89	3.36
2	初対面の人と話すのが好きだ	3.49	4.11	4.00
	I-IV. 課外活動における充実度	3.36	3.85	3.79
6	クラブ・サークル活動で自分は充実している（学生の頃充実していた）	3.14	4.00	3.71
7	クラブ・サークル活動以外の課外活動で自分は充実している（学生の頃充実していた）	3.57	3.70	3.86
	I-V. 正課活動における充実度	3.84	3.72	3.57
5	授業で学ぶのが好きだ（学生の頃好きだった）	3.71	3.33	3.21
8	好きな授業・後輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	3.97	4.11	3.92
	II. イベント全体での共感度調査	学生	教員	職員
	II-I. 場を楽しむ	4.59	4.67	4.72
11	楽しかったと思う	4.71	4.67	4.79
14	参加した甲斐があったと思う	4.47	4.67	4.64
	II-II. 大学を創る意欲の喚起	4.22	4.67	4.64
15	一緒に大学に関して何かをしたいと思うようになった	4.09	4.67	4.57
12	大学を共に創ろうとは思えなかった*	4.34	4.67	4.71
	II-III. 大学の活性化	4.42	4.78	4.54
18	イベントスタッフがいきいきしていた	4.40	4.78	4.64
17	周囲の参加者はつまらなそうだった*	4.44	4.78	4.43
	II-IV. 構成員同士の親近感の増幅	4.33	4.61	4.72
13	他の参加者に対し、以前より親近感が持てるようになった	4.22	4.78	4.64
16	アットホームな雰囲気があった	4.44	4.44	4.79
	II-VI.テーマ設定①の意義	3.71	3.65	4.11
19	テーマ①の発表を聞いて元気な学生のイメージが変わった	3.69	3.43	4.15
20	京都産業大学の原動力について考えが深まった	3.73	3.86	4.07
	II-VII.テーマ設定②の意義	4.34	3.66	4.26
21	テーマ②の発表を聞いてワンキャンパスのイメージが変わった	4.21	3.25	4.00
22	ワンキャンパスを活かす取組について考えが深まった	4.44	3.88	4.14
23	ワンキャンパスを活かす取組に関わってみたい	4.29	3.50	4.43
24	もっとワンキャンパスを活かす取組内容を考えてみたい	4.41	4.00	4.46
	II-VIII.テーマ設定③の意義	3.83	3.86	3.86
25	テーマ③の発表を聞いて学生にとって好ましい授業のイメージが変わった	3.76	3.71	3.93
26	良い授業・人に勧めたいと(学生が)感じる授業について考えが深まった	3.90	4.00	3.79
	III しゃべり場での共感度調査	学生	教員	職員
	III-I. もっと話したい	3.96	3.62	3.58
27	しゃべり場は、時間が短く、もの足りなかった	3.41	2.56	2.79
30	しゃべり場は、時間が長過ぎ、途中で飽きてしまった*	4.51	4.67	4.36
	III-II. 意見の出しやすさ	4.35	4.62	4.50
29	しゃべり場では、自分はリラックスして意見を言う事ができた	4.21	4.56	4.50
35	しゃべり場で、グループの参加者は概ね自由に発言できていたと思う	4.49	4.67	4.50
	III-III. しゃべり場の意義深さ	4.59	4.71	4.52
31	しゃべり場には、意義を感じない*	4.51	4.67	4.64
34	しゃべり場で、学生・教員・職員でしゃべってみてよかった	4.80	4.78	4.57
28	しゃべり場では、なんの気づきも得られなかった*	4.47	4.67	4.36
	III-IV. 相互理解の促進	4.47	4.73	4.67
33	しゃべり場では、私の言いたいことは誰にも伝わらなかった＊	4.43	4.67	4.64
32	しゃべり場で、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	4.51	4.78	4.69
	IV.テーマに関する共感度調査	学生	教員	職員
	IV-I.京都産大生は元気である	3.05	3.34	3.15
37	京都産業大学内では積極的・前向きと感じる人によく出会う	3.44	3.89	3.83
40	時流の変化を考慮に入れても昔の産大生より今の産大生の方が、チャレンジしない＊	2.65	2.78	2.46
	IV-II.ワンキャンパスへの関心	4.68	4.78	4.70
38	京都産業大学がワンキャンパス（一拠点総合大学）だと知っていた	4.68	4.89	4.54
39	ワンキャンパスを活かした授業やイベントを行ってほしい	4.68	4.67	4.85
	IV-III.良い授業の定義	3.67	3.95	3.65
36	良い授業とは「内容（コンテンツ）」の良い授業である	3.59	4.11	3.85
41	良い授業とは「教え方」の良い授業である	3.74	3.78	3.45

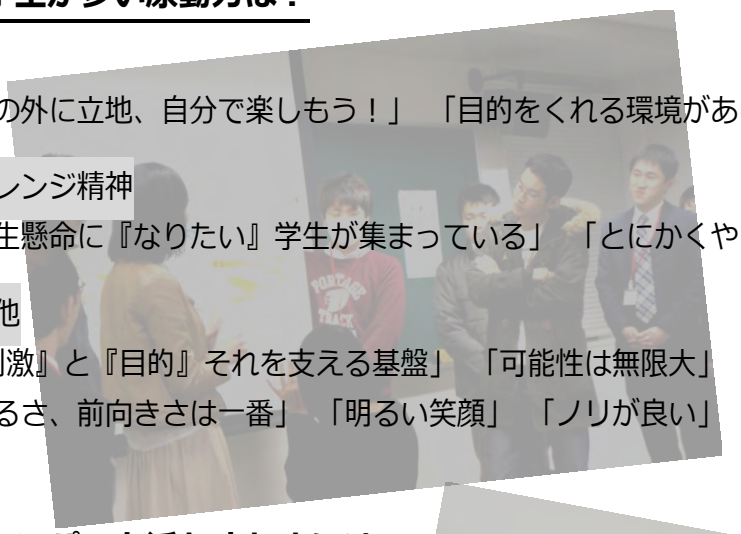
※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号（掲載順に付与）を示しています。

※数値は、各項目の平均値であり、4.00 以上をゴシックで、4.50 以上をマーカーで示しています。

※設問末尾に*が付与されている項目は、反転項目です。

本プロジェクトの意見詳細

元気な学生が多い原動力は？



環境

「街の外に立地、自分で楽しもう！」　「目的をくれる環境がある」　「敷地が広い」

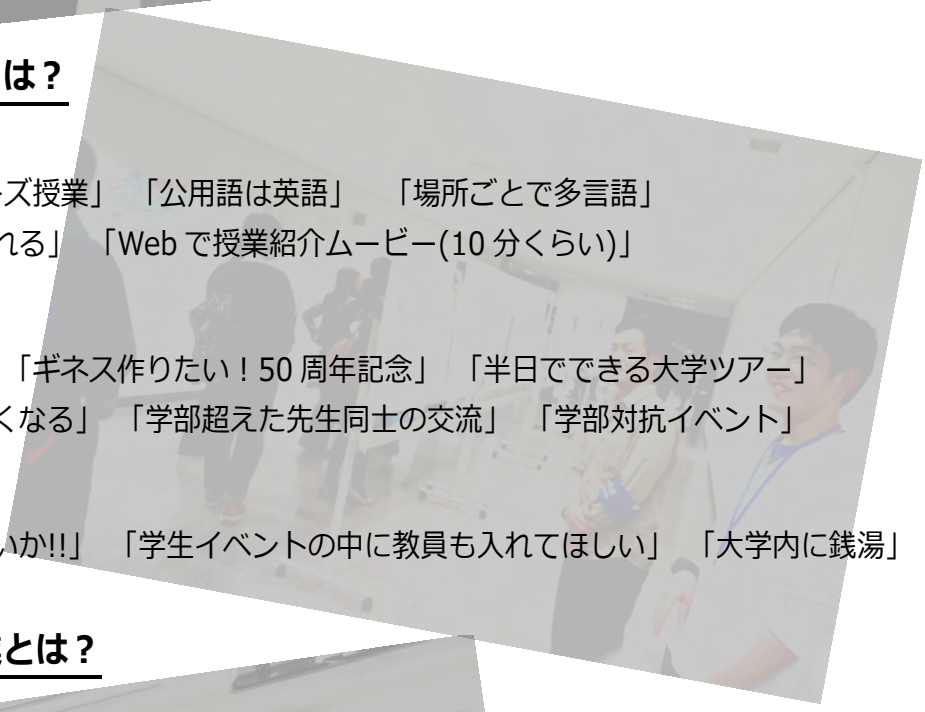
チャレンジ精神

「一生懸命に『なりたい』学生が集まっている」　「とにかくやってみる!!」　「サギタリウスチャレンジ」*1

その他

「『刺激』と『目的』それを支える基盤」　「可能性は無限大」　「コミュニケーション力」
「明るさ、前向きさは一番」　「明るい笑顔」　「ノリが良い」　「あいさつの声が大きい」

ワンキャンパスを活かすためには？



教育

「教育教養部の復活」　「シリーズ授業」　「公用語は英語」　「場所ごとで多言語」
「いろんな学部の授業を受けられる」　「Web で授業紹介ムービー(10 分くらい)」

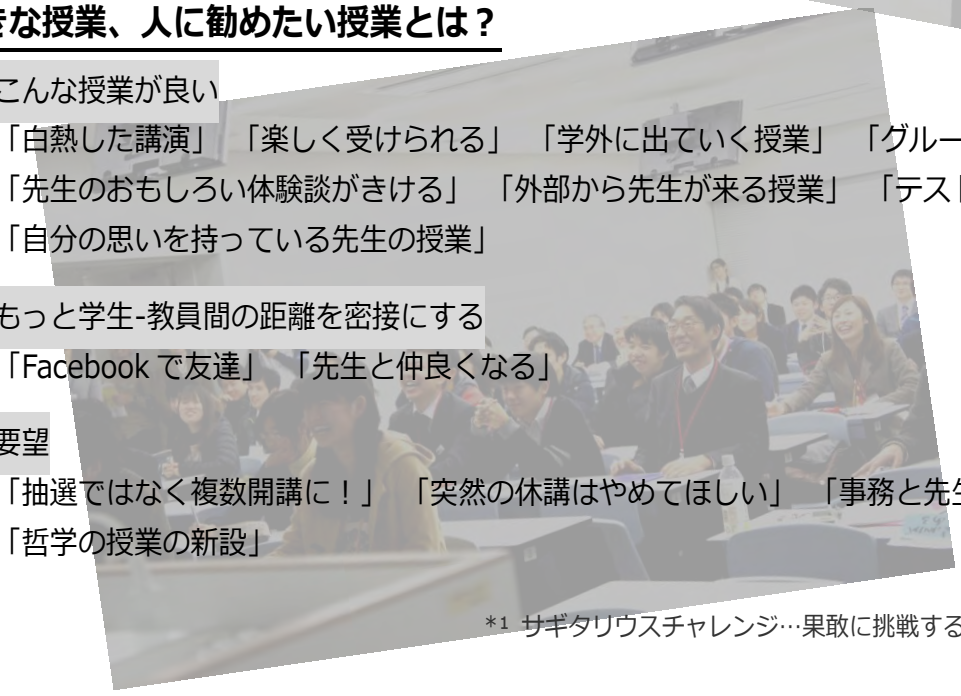
交流＆イベント

「全学部で協力して商品開発」　「ギネス作りたい！50 周年記念」　「半日でできる大学ツアー」
「何しても規模が大きくて楽しくなる」　「学部超えた先生同士の交流」　「学部対抗イベント」

その他

「１万３千人が集まれば街やないか!!」　「学生イベントの中に教員も入れてほしい」　「大学内に銭湯」

好きな授業、人に勧めたい授業とは？



こんな授業が良い

「白熱した講演」　「楽しく受けられる」　「学外に出ていく授業」　「グループディスカッションがある」
「先生のおもしろい体験談がきける」　「外部から先生が来る授業」　「テストが難しいが面白い」
「自分の思いを持っている先生の授業」

もっと学生-教員間の距離を密接にする

「Facebook で友達」　「先生と仲良くなる」

要望

「抽選ではなく複数開講に！」　「突然の休講はやめてほしい」　「事務と先生の連携」
「哲学の授業の新設」

*1 サギタリウスチャレンジ…果敢に挑戦する学生をサポートする本学の取組み

意見の分析

テーマ①“元気な学生が多い原動力は？”では、「一生懸命に『なりたい』学生が集まっている」「成長したい」などの**学生のチャレンジ精神旺盛な意見**や、「クラブ・サークル活動などで楽しむ、活気づく」「学内イベントが多い」などの**仲間意識を感じさせるようなもの**、また、本学ならではの「サギタリウス・チャレンジ(p.14 参照)」という意見もありました。これらのことから、元気である**学生自身や、大学の環境・取組が原動力になっている**と思われます。他には、「他大学からの言葉では産大生は元気といわれている」という意見もあり、本学の１つの強みとして、失わず更に伸ばしていけるように、努力していく必要があると感じました。

テーマ②“ワンキャンパスを活かすためには？”では、「教養部の復活」「学部を越えた教員のリレー授業」など教育に関する意見や「ギネスを作りたい」「1,3000 人集まれば街だ」など**学生・教員・職員の学部を超えたイベント開催に関する具体的なアイデア**も得られました。本学は、文系・理系あわせて９学部あり、全ての学生が同じキャンパスに通っています。そこで、全学部の教員がリレー方式で授業を行うとなると、１つの授業で他学部の学習内容の概要を把握する機会にもなり、視野の広がりも期待できます。また、授業での交流だけではなく、1,3000 人以上という本学の規模の大きさを利用して、ギネスに挑戦したり、街をつくったりというようなイベントでも盛り上がれる可能性は十分にあります。

テーマ③“好きな授業、人に勧めたい授業とは？”では、「教員と仲良くなりたい」「教員とのコミュニケーション」「楽しく受けられる」「(ゼミやグループワークで授業に参加していると)時間が早く進むため退屈しない」など、**学生・教員間の距離が近い、または充実感が得られる授業**が好まれる傾向にあるという意見が得られました。特に少人数授業では教員との距離が近くコミュニケーションがとれる・仲良くなれる機会は多いと考えられます。ゼミやフィールドワークのような授業は、時間が早く進むと感じるなど、充実感を得られる授業であるようです。多人数での授業であっても、学生・教員が一緒に授業を行っている「自己発見と大学生活」のような授業もあります。現状では少人数授業に多く見受けられますが、多人数での授業でもこういった授業を増やしていければよいと思います。

今後の課題

ここでの意見は、本プロジェクトで挙がった意見の一部ですが、他にもたくさんのユニークな意見・授業への要望が挙がりました。これらを参考に、学内でイベントを企画したり、教職員に要望を伝えたりと、燦の活動理念である**「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく」学内中の人を巻き込んで取組んでいく**ことを目標に活動していきます。

Fig10.燦メンバーの記念撮影

京都産業大学データ

文責：吉田　天平

ここでは京都産業大学の学生数や学部の種類など、様々なデータをお伝えします。これらのデータを参照することで、これまでに紹介したイベントをより深く理解することができます。

京都産業大学ってどんなとこ？

京都産業大学は **1965 年に経済学部・理学部を有し、上賀茂神社の裏手、神山の地に設立された一拠点総合大学**です。2012 年現在、学部は経済・経営・法・外国語・文化・理・工・コンピュータ理工・総合生命科学の**計９学部が存在**しています（コンピュータ理工学部・総合生命科学部設置に伴い、工学部は募集停止）。山の中に作られたキャンパスは、猿や鹿が出る自然豊かな大学です。

Fig11. キャンパス内の風景

どのくらいの人がいるの？

京都産業大学には 2012 年現在、**学部生** 12,970 名、**大学院生** 237 名、**教員** 387 名、**職員** 412 名の**合計 14,006 名**が在籍しています。学部生の内訳は、経済 2,775 名、経営 2,921 名、法 2,938 名、外国語 1,945 名、文化 947 名、理 420 名、工 75 名（工学部は 4 年次のみ)、コンピュータ理工 581 名、総合生命科学 368 名となっています。

これを文系と理系に分類してみると、文系 5 学部計 11,526 名、理系 4 学部計 1,444 名で京都産業大学生の内およそ **89%が文系学生**ということになります。また、全学部生のうち**女子学生は 3,820 名**で、割合としては約 30%を占めています。

因みにキャンパス内の人口密度は約 0.023[人/m^2]ですので、およそ 43.5[m^2]に 1 人存在していることになります。これが**パリの人口密度と大凡等しいということは全く知られていません。**

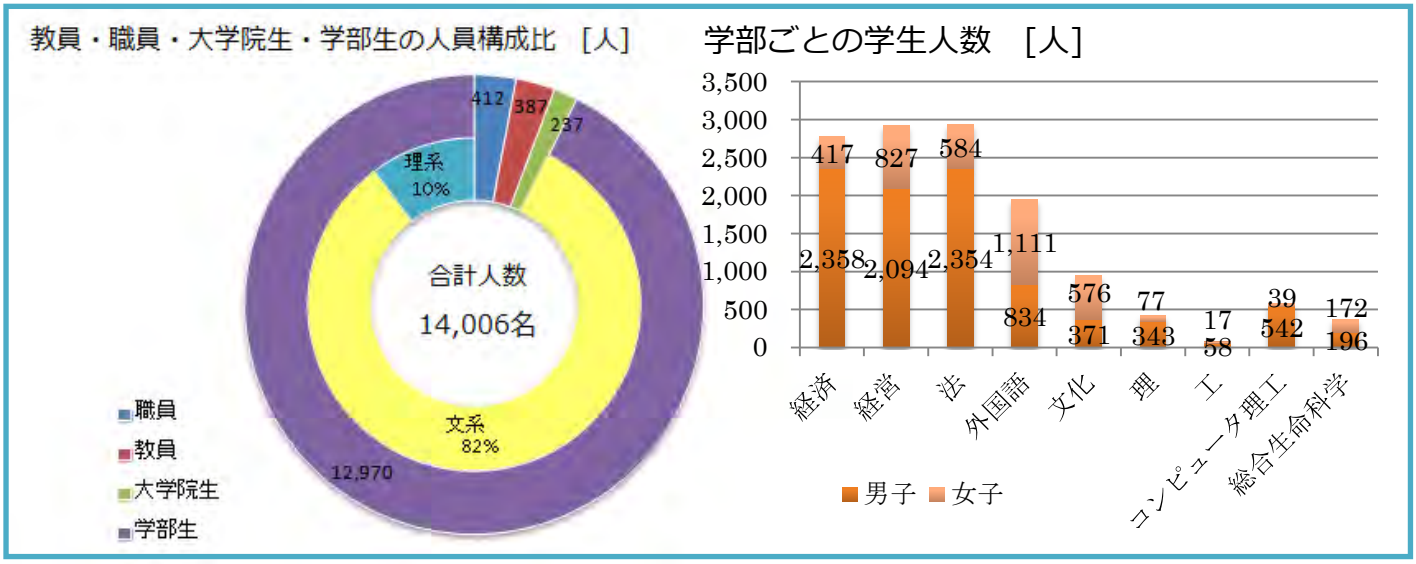
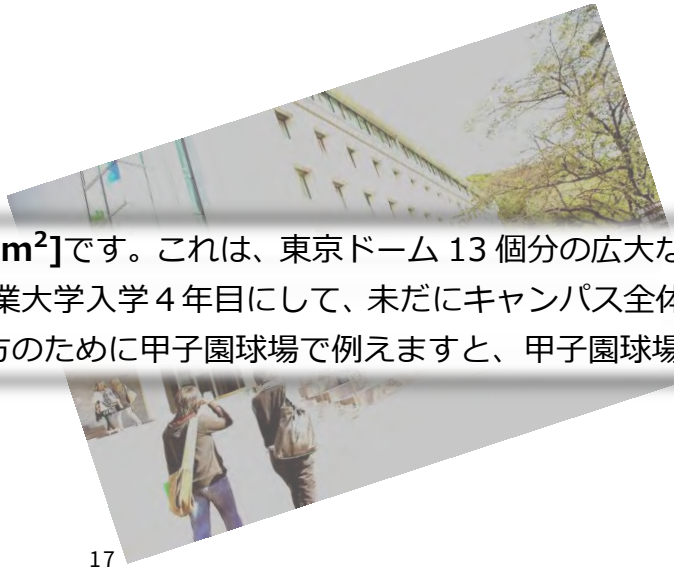


Fig12. 学部構成データなどのグラフ

キャンパスの広さは？



京都産業大学の敷地面積は 611,353[m^2]です。これは、東京ドーム 13 個分の広大な面積です。当コーナー担当ライターは京都産業大学入学 4 年目にして、未だにキャンパス全体を把握できていません（笑)。因みに関西の方のために甲子園球場で例えますと、甲子園球場 16 個分となっています。

おわりに…。

文責　伊藤 琴音

「アホなことを真剣に！マジメなことを楽しく！」

この言葉に惹かれた学生が、今年は AC 燦に 16 名入ってきました。

誰もが憧れる「自由」。大学は、「自由」に満たされた空間であると感じています。その自由が与えられた４年間。自己判断に任された４年間。そんな大学生活、あなたなら何をしたいですか？あるいは、したかったことは何ですか？

各々のしたい大学生活を思い描き、**皆がたどり着いたのが、「学生ＦＤスタッフ　ＡＣ燦」でした。**

AC 燦は、しゃべり場で「理想のデートプランとはどのようなものか」などのアホな話題についてもとことん真剣に話し、ときには授業改善などの真面目な話を楽しく考え、周りを巻き込みながら熱心に活動を行っています。

三人寄れば、なんとやら。問題意識を持ったさまざまな立場の方が集い、多様な視点から課題解決に取り組むことができれば、**一見、難しいと思われる授業改善、さらには大学の改善も少しずつ進んでいくと信じています。**

現在、学生による教育改善活動は、京都産業大学だけではなく、日本全国の大学に広がりをみせており、同時に多くの人に認識されつつあります。

目的は漠然としているかもしれませんが、これから「京都産業大学のためになにかしたい！」という思いを抱いている、より多くの学生・教員・職員の方に AC 燦の存在を知ってもらい、**学生として私たちにできることについて模索していきたいと思います。**

Fig13. 左：AC 燦集合写真　右上：しゃべり場風景　右下：付箋データ

AC燦　共創データブック

第 2 号

平成 25 年 2 月 23 日(2013 年 2 月 23 日)発行

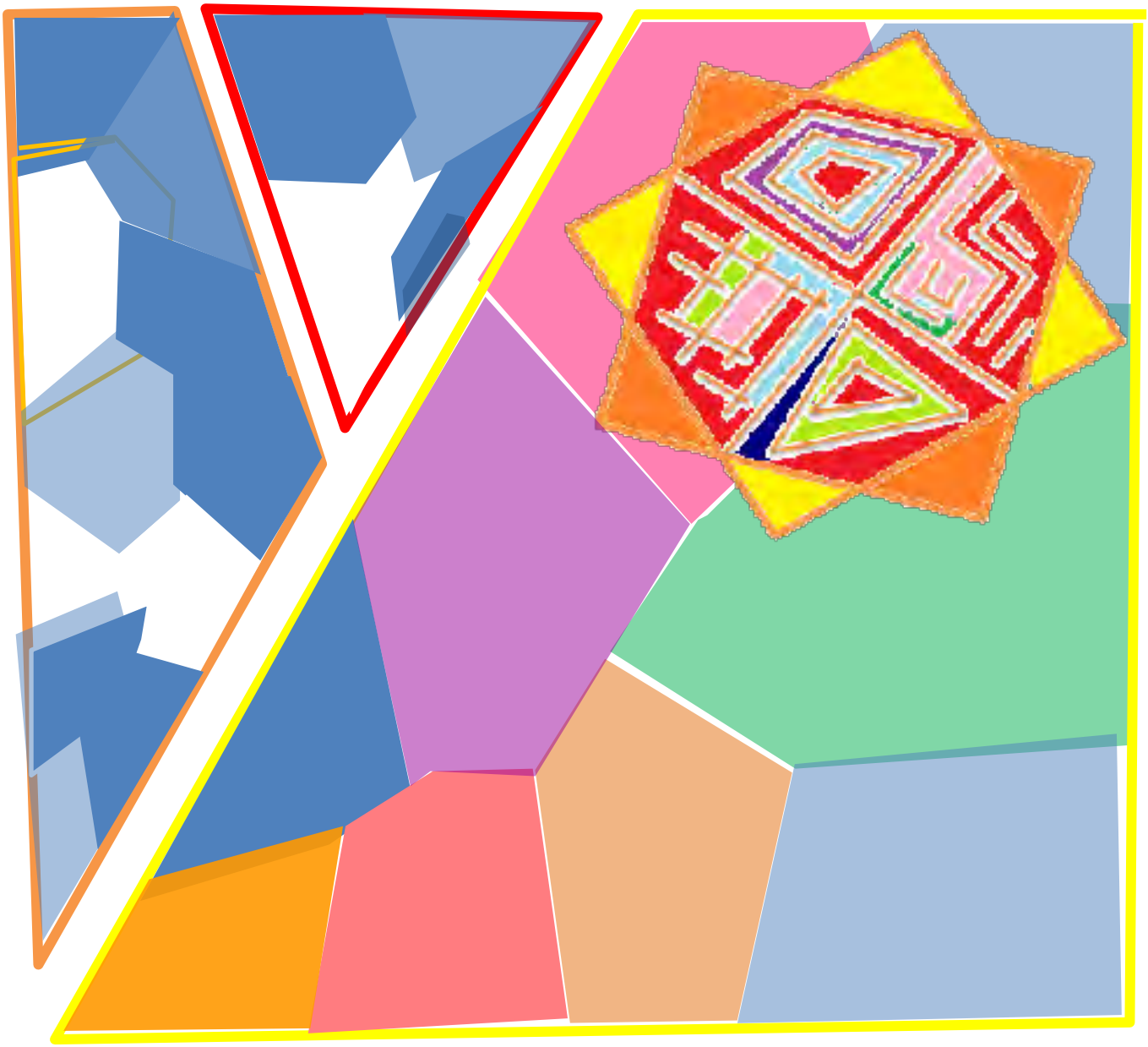
第 1 号　平成 24 年 8 月 23 日(2012 年 8 月 23 日)発行

編者　　伊藤琴音(法3)・乙倉孝臣(経済2)

芝山侑希(文化3)・竹谷美里(経営1)

吉田天平(理4)・坂本由香(法1)

発行者　　AC燦データブック製作メンバー



企画・編集：京都産業大学　学生 FD スタッフ　AC 燦
協力：京都産業大学　教育支援研究開発センター
〒603-8555 京都市北区上賀茂本山/Tel.075-705-1729
E-mail:kyoiku-shien-center@star.kyoto-su.ac.jp

京都産業大学